

ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナーの自然観における 循環の意識と月の描写について

三田尾 有希子 (北海道大学)

18-19世紀イギリスの画家 J.M.W.ターナー (Joseph Mallord William Turner, 1775-1851) は、17世紀以来の大陸の作例に連なる海景画や、自身の居住地として親しんだテムズ川の風景など、水面の描写を含む作品群を多数制作した。本発表では、当時の自然科学の状況やターナー自身の詩文との関わりを踏まえて、ターナーのうちに循環するものとしての自然のイメージがあり、それを表現する主題として「月」が描かれていたという考えを導くことで、新たな作品解釈の可能性を提示するものである。

ターナーには、イタリアの陽光に魅了され「太陽は神である」と言い遺したという逸話が残るように、その作品において太陽との深い関わりが指摘されている。一方、アカデミーに出展した最初の油彩画《海上の漁師たち》(1796)以来、《戦艦テレメール号》(1839)や《平和-水葬》(1842)など、月を描き入れた作品を制作し続けている。これらの作品を見ると、太陽が、画業の展開とともに画中に明確な形状を持って描き出されるようになっていくのに対し、月は、画面に陰影を生み出す明瞭な光源から、細く淡い三日月のような微かな存在へと変化しており、明らかに太陽とは異なる一定の役割を与えられていたと考えることができる。

このような月の描写を検討する上で、まず、ターナーのうちに絶えず移り行き循環するものとして自然を捉える意識があったことを指摘する。同時代の科学の展開に合わせて、地球の物質の流動性や大気現象のプロセスなどが検討されていく中で、循環する自然法則の図式的なイメージが詩人たちによっても言及されていたことはすでに明らかになっている。ターナー自身、ジェイムズ・トムソンの円環的な宇宙のイメージを渦巻き型の構図の描写に繋がる思想として取り入れていたことが指摘されている。なかでも、水に関わる現象が特別な位置を持っていたことが、アカデミーでの講義原稿などからも分かる。ターナーのうちに変化し続ける状態への意識が存在しており、動きを伴う媒体への関心があったと想定される。

以上を踏まえて、ターナーの描く月が象徴するようになったものを検討する。18世紀後半は、上空の大気現象への関心が高まり、潮汐運動や天体の運行に関する理論の構築によって、循環する自然の関係性が把握されていく時代であった。こうした中で、ターナーの月の描写も、自然における循環という動きの様子を想起させる象徴へと変化したと考えられる。《戦艦テレメール号》の月は、ゲーテの色彩論に基づいた渦巻き構図の対作である《光と色彩(ゲーテの色彩論)、大洪水の翌朝》(1843)および《影と闇、大洪水の夕べ》(1843)と同様に、循環する関係を示しているのである。